

正宗白鳥

志賀直哉の文学

志賀直哉の文学

ポーランドのシェーンキウイッチの「クオ・ヴァデイ
ス」やメレジコフスキの「先駆者」などが、舶来の新
作品として熱読されて話題になったのは、日露戦役前
であつた。(これについては、他の雑誌に於て回顧的感想
を述べている。)前者は、ローマに於けるキリスト教迫
害時代を題材としたものであり、後者は、文芸復興期の
ダ・ヴィンチなどを取扱つたものであつて、日本の歴史
小説とはちがひ、叡智がきらめいていた。小説的興味に

駆られて読みながら、人生の歸趨きすうに思いが凝らされるのであった。これに反して、ただ、読者を面白がらせようと企まれているその頃の日本の小説が、我々にはさほど面白くなかったので、我々の小説観はあの頃おのずから変化したのであった。小説でも遊戯文字でない小説が真に読み応えがするのであると確信するようになった。自然主義文学発生前の事である。

それから、私など、さまざまな舶来小説を読んだ。作風は千差万別であって、傑作から傑作と続いているように、果てしない感じがした。そして、いつ頃であったか、

ふと、自分の読んだ小説の極北は、ストリンドベルクの「ダマスクスヘ」（これは戯曲体ではあるが）と、フロオベエルの「ブブアールとペキュシエ」であろうと感じたことがあった。小説の大道もここまで行って極地に行詰まるか。

あの頃、馬場孤蝶が、或雑誌に、「ブブアールとペキュシエ」の梗概を出したのを、私は読んで、これは風変わりな、面白そうな小説だと思っていた。その頃、田山花袋は、新たに英訳されたフロオベエル全集を買ったそうだった。「この人のはみんな読んでしよう」と訊いた

ら、「いや、まだ最後のを読んでいない」と云っていた。この小説の読後感はついに聞く機会はなかったが、フロオベエル心酔の彼は、多分、この酢豆腐すどうふ的小説に対して、捏造ねつぞう的興味を寄せたであろう。私もいつか、この「ブヴァールとペキュシエ」を読むことは読んだのだが、はじめの方の、独身で筆耕業者である二人が偶然知合いになった事から、そのうちの一人が叔父から遺産を貰って急に生活法を変更するあたりが、小説的に面白くって、それから次第に読みづらくなり面倒になり、退屈になるのであった。馬場孤蝶の梗概で読んだ時の方が意味深長

らしくて、自分の空想で面白がっていられたのである。

ところで、今度、新庄嘉章の旧訳で読んで、私は含蓄ある面白さを感じたのだ。不思議に今の日本にでも当て嵌り^{はま}そうなところがあるのだ。「ブヴァールとペキュシエは私の心をすっかり満してしまいましたので、私はついに彼等となつてしまいました。彼等の愚かさは私の愚かさです。これは死ぬほど辛い思いです」と、作者自身は云っているが、作中の彼等を愚人と云切つて、自分を彼等以上の賢明な人間と思ひ得られる人間が存在しているのであるか。人間の戯画であり、諷刺であると云わ

れているが、日本の今日の文壇人にしても、その頭脳の知識の運転加減が、この作中の二人と同類のように、私には思われたりするのである。科学神学政治文学などの受入れ方のいい加減なところ。気まぐれなところが、彼等と我等とよく似ているのである。彼等も我等もそこが人間らしくていいので、人間としてこの程度をよしとすべきであろうか。

「僕の意見を知りたいかいね」と、ペキュシエが云った。「有産階級の奴は人情知らずだし、労働者はやきもち焼きだし、坊主達は下司な人間だし、それに、民衆と

きたら、飯鉢さえあてがわれてたら、どんな専制者でも受け入れるんだから。——ナポレオンは仲々いいことをやってくれたよ。彼の力で、民衆を眠らせ、民衆を踏みにじり、やつつけて貰いたいものだ。——正義を憎み、卑怯で、無力で、盲目な民衆は、その位の報いは受けても悪くはあるまい」

ブヴァールは考えていた。「へん、進歩だなんて、まるで寝言みたいなものさ」そして、彼は付け加えた。「それに政治なんて、穢けがらわしいもんだ」

彼等はこの程度の愚かさを云っているのだが、我等に

してもこの程度の賢さか愚かさを、口にし筆にしている気になっっているのである。フロオベエルは人間の愚かさを追究せんとしたのであろうが、ストリンドベルクは、あちらこちらに向って精神的争闘をしながら超人的神秘境に入ったつもりになっている。

自然主義の盛んな頃には、フロオベエルは守り本尊の如く取扱われていたらしかったが、中澤臨川は、フロオベエルのように隠遁的生活をすごすのは腑甲斐ない。ゾラの奮闘的態度を模範とすべきだと云っていた。どちらの態度がいいか悪いか、人々の好みに依る外ないのであ

るが、今日の時世では、文壇人もゾラのような積極的態
度で世に処するのが正しいようでもある。私は、案外興
味ある、フロオベエルの未完の大作を復読しながら、島
崎藤村が、「稟才ひんさいは根気なり」というこのフランスの巨
匠の言葉に共鳴して、努力を続けたことを思出し、自然
主義の自己没却の客観性を持続しながら、「ボヴァリイ
夫人」は作者自身であるとか、「ブヴァールなどもつま
りは作者自身だ」とかいうような、こんがらがった文学
観を思出したりした。そしてこの頃新版本で読んだ「暗
夜行路」について考慮をめぐらしたのである。フロオベ

エルと、志賀直哉とは、縁故がある訳ではないのだが、私の頭のなかで勝手に連関されたのである。

荷風、潤一郎は一躍して文壇の寵児となったのであった。作風が派手で、文章に色も香もあつたためである。時の廻り合せもよかつた。直哉はそうでなかつた。白樺派の作家が文壇に注意されるようになって、私などはあまり関心を持っていなかった。有島武郎が文壇の内外に目ざましく迎えられるのを、批判的に見ていたが、志賀が新進作家として傑れた素質を持っていることを認めてはいなかつた。彼は、徐々として地歩を占め、いつの

間にか彼独得の文学を樹立したと云っている。私は志賀の作品は、改造社の円本に収集された作品全部を読んでいる。その後雑誌などに発表された小説随筆のたぐいを、目に触れるかぎり読んでいる。大抵は面白い。印象鮮明である。

作品の数が少く、それも短篇ばかりで、「暗夜行路」が唯一の長編であって、近年では、これが現代日本文壇での最高の作品であるように評価されている。文壇の輿論で極められているようである。それで、私はこの小説は必ず熟読しなければならぬと思っていた。芸術品のよ

し悪しは、作者一箇の考えで極められるものではなく、一二の卓見家気取りの評家によって極められるものでもなく、何となく輿論によって極りがつくものらしい。一人や二人の鑑賞家が異説を唱えても、それは一般には通用しない。菊五郎は当人の自惚れの強さのために、当代一の名優になったのではなく、或種の劇評家の推讃のためにならなくなったのでなく、何となしに起った一般の人氣によって、代表的歌舞伎俳優の地位を占めていたのである。夏目漱石の書翰集を読むと、彼が自己の作品のまずさに気おくれして出版後にそれを読み返し得ないこ

とを誰かに宛てた手紙のなかで書いていた。そして、世間が好評を以って迎えたので、安心して読んだと書いてあった。無論、自信の強烈な作家も数少からず、自己の作品を読返し読返し読んで悦に入っている幸福人も少くないにちがいない。しかし、人間は結局は、周囲からちやほやさされると、自分もえらくなつたつもりで勢いづき、周囲から絶え間なく、けなし続けられると、自信家も次第にしよげて自信を失うようになるのである。フロオベールは、「ボヴァリイ夫人」を書いていた間、書いたものを知人に見せて意見を聞いたのだそうだが、知人の意

見がさまざまなので、それを採用して作品の訂正を試みたため、肝心の名作もめちやくになつたという噂もあつた。頑かたくなに、他から動かされない作家は本当は稀れなのである。

それとともに、世間の評判が高いと、それをよく思わなければならぬような気持がするのである。菊五郎の芝居を觀、梅原、安井の絵画を觀、志賀、谷崎の小説を読むにあたり、我々はまずそれ等の美を認めんと心掛けるのである。芸術家も、そういう態度で鑑賞されるようになれば幸福である。私は、「暗夜行路」「細雪」下巻、「宮

本武蔵」など、幸福なる作家の作品を一度期に読んだ。「宮本武蔵」は芸術としての低調さを感じながら、兎に角一二巻を、気楽に読通した。世俗の読者を面白がらせる手腕は認めなければならぬ。「細雪」も、何処からか読みだすと、気軽に読み続けられた。「暗夜行路」は、昔、前篇だけ読んだ時に読みづらかった如く、今度も読みづらかった。この作家の短篇は読み易く、読みながら楽しみを覚えるのであるが、「暗夜行路」は私には難解である。読んでいても作中に惹入れられないから、上の空で読んでいるようなもので、印象が浅い。そして、私はたびたび

読返した。どうにか一篇の趣旨に通ずる事が出来た。「人物の心の闘争」が全篇を貫いているのであるか。暗い影が身についている男の生涯。激しい闘争の表面に現われない消極的闘争のようなもの。ストリンドベルクのように争闘を表に現わして深刻味を發揮しないところに、含蓄美があり、奥床しさがあるとも云えようか。私自身の好みから云えば、この小説の主人公には共鳴されないのであるが、この作者がこの人物を描叙して、感傷に墮おちず、抒情癖にも取附かれず、冷静な写実態度を持しているために、この作品が今日の日本文壇の最高位を占め

ているのであろうか。

建築の如く、彫刻の如く、この小説は長篇小説としての構成が調っていて、堂々たる本格小説になっているのであるが、しかし、お里は争えない。随筆趣味、私小説調が漂っていて、そこが読者に愛玩されるのである。たとえば、旅行者として尾の道を中心とした瀬戸内海の風光の翫賞、奈良京都などの古社寺や博物館にて観る古美術の鑑賞、電車や汽車での同乗客の観察批判など、随筆的興味ある記事が頻りに挿入されている。これ等の記事を除いたら、小説全体が痩せるのであろう。しかし、こ

れも一種の小説作風である。私には、生れたばかりの赤児が丹毒に罹るところが最も感銘された。赤児も病と闘いながら、生きんとする意志を現わすのである。このあたりの描写、有振れた事を取扱いながら真に迫っているのは、やはり作者の筆力の傑れているためであろう。主人公の謙作も、おりに触れて、自分の過去を回顧して、「自身の内に住むものとの争闘で生涯を終る。それ位なら生れて来ない方がましだった」と知友に述懐したが、「それでいいのじゃないかな。それを続けて、結局憂なしという境涯まで漕ぎつけさえすれば」と相手は答えた。そ

ういう生存態度を志しながら、作者はこの一篇を書続けたのであろうか。

私はどうにか通読したあと、これが現代日本文壇の最高峰の作品であろうかと疑惑を起したが、しかし、これを凌いで、我等をして仰ぎ見させるような大傑作が外にあるらしくはないのである。完成しなかった藤村の「東方の門」や秋聲の「縮図」は、彼等の筆力のまだ衰えていなかったことは分っているが、敗戦を一時期とした前代の作品である。

私の少年の頃には、「逍鷗紅露」と云ったような文壇

的熟語が出来ていた、逍遙鷗外紅葉露伴が当時の代表的文学者とされていたのである。彼等は明治の新しい時代の新人であつた。定名ある大家に成りすましていたが、まだ二十代三十代の若さであつた。それで、今日、彼等の青年期の作品を読むと、幼稚であり浅薄であると感じざるを得ないのだが、あの時代にあの程度の作品を出現したのは蔑視されないもので、日本の文学史が彼等によつて新たに道を開かれたと云つてもいい。天の日本人に与えた才能はあの程度のもので、それ以上のものを彼等に求めてはならぬように運命づけられているのか。誰も予

期しなかった敗戦時代に、日本芸術界が文華さんらたる光景を呈し、明治時代の作家以上の作家が盛んに出現しているとしたら不思議である。私の記憶によると、逍鷗紅露以後では、藤村獨歩、それから花袋が一まとめにされて、文壇の輝かしい存在となっていた。それと対立して、漱石鷗外が一方の権威となっていた。鷗外は一生を通じて最高の地位を保っていたようなものだ。逍鷗紅露以来菊池芥川有島などの時代にいたるまで、日本は、アジアに於ける異例の国として、目ざましい進歩発展の道を辿ったのだから、それにつれて、文学芸術も進歩向

上を遂げるのがあたり前なのだが、敗戦になって、才能に富んだ傑れた作家が輩出しているとしたら不思議だ。生活困難な不安な世をごまかすためのさまざまな低調な娯楽芸術の出現は当然であるとして、芸術という名にふさわしい芸術、精神の糧ともなるような芸術。小説だけについて云っても、明治以来の定評ある名作を尻目にかけて、今をほこるような小説が続々出ていると不思議である。しかし、不思議でも何でも、現在出ているのだから為方がないと云う者があるかも知れない。そう思う者が多いかも知れない。私も、新聞小説家として確

固たる手腕を持っている作家が幾人が存在していることを、この頃耳にしている。百万二百万人の新聞読者を必ず惹付ける技倆を具えているというのだから、私には異様に聞えるのだ。朝日、毎日、読売などの大新聞は、それ等の少数の拔群の作家を取りかえ引きかえ雇用しているのである。昔はそうでなかった。私の青年時代には、大阪朝日に渡邊霞亭、大阪毎日に菊池幽芳が専属作家として、小説を連載して、一般の読者受けがよかった。しかし、文壇では彼等を通俗作家として軽視していた。自然主義文学が勃興して以来、小説もただの娯楽用の産物

ではなく、人生の真を写して精神の糧とすべきものであるように、六ヶしく考えられだして、大衆物通俗物は文壇内の聖地から排除されるような有様であつたが、日露戦役以前、自然主義発生以前の文壇に於ても、霞亭幽芳などは、読者の人気はあるに関わらず低調な通俗作家であり、家庭小説家であるとされていた。西園寺公の文士招待の時に、幽芳は、自分も招かれることを予期して、その準備をしていたのに、その当てが外れたのであつたと、文壇の噂に上つたのを私は耳にした。西園寺公の頭には、通俗非通俗の差別はなかつたのであろうが、人選

をした者が文壇人であったから、通俗作家と云われて
る作家を除外したのであった。通俗蔑視観は微弱ながら
もまだ存在しているらしく、通俗作家は日本芸術院会員
として撰抜されていないようである。しかし、その区別
も汲々乎として危いかなと云った感じがする。そういう
区別は次第に取払われるであろうし、却って在来の意味
で云う通俗作家が、文壇的にも次第にのさばるのではな
いかと、私には邪推されるのである。

要するに、「小説の大道」はそこに落着くのがいいの
か。例の「ブヴァールとペキュシエ」のなかにも出てい

るのだが、数人で小説の話をはじめると、そのうちの一人が、「作家は、われわれを楽しませるような色彩で人生を描いて見せてくれなくちやなりません」と云うと、「いや、在りのままに描くべきです」と、ブヴァールが反対した。「じゃ、ただ人生を模写すればいいんですね」「それは模写じゃありません」

読者を楽しませるような色彩で人生を描いて見せるといふのは所謂通俗作家のねらい所で、そこには小説の大道が存在するのもかも知れない。読者を楽しませそうでない、売れそうでもない小説を十年もコツコツ書続けて、それ

も未完のまままで死んで行ったフロオベエルの如きは、これからの作家の模範とすべきものではないのであろう。少くも敗戦後の今日の文壇では当世向きの態度ではないのである。

ところで、「暗夜行路」は十年以上もかかった作品であるそうだ。無論今日とは世の形勢のちがった時代に書かれたのであるが、悠然泰然と腰を落着けた作品であり、今日の多くの作家に見られるセカセカした態度はここには見られないと云っていい。そして、こういう態度の作品が、今なお一部の若い作家や若い文学愛好者に敬意を以

って迎えられているのが、私の心を捉えるのである。「暗夜行路」をはじめ、志賀の作品を日本現代の最高作品として、それ等を小説規範とするのは何故かと考えるのである。私など老齢に達している者は、同年輩の作家年少後進の作家の優秀な作品に、及び難しと感じ、時として舌を捲く思いをすることはあっても、それを真似ようとか模範としようとは思わないのであるが、道に志す若き人々は、どの方面に於ても師たる人を求めるのが、古も今も人間の習いであるらしい。今日の如く乱世の文壇に於ても、傑作の目標を何処かに求めるのであるか。そし

て、小説の大道に於ける目標としては、荷風よりも潤一郎よりも、志賀の方が柄がいいのである。荷風を模すると、いや味たつぷりの者になり兼ねない。志賀の文章は真似そこなっても間違いはないのであるか。

しかし、荷風潤一郎の小説が、文章でも思想でも前代のものであり、我等は彼等の作品を古典として鑑賞しているのであるが、志賀の「暗夜行路」にしても古典のように見做される。戦争を通り越し、戦後の苦境に生きている我等は、過去の先輩に対し、彼等は何も知らなかつたと、人智の浅はかさを感ずる事がある。我等は彼等よ

りも、日本の正体、人世の真相をよく学んだという訳である。稀有けうの聰明人であつた福澤論吉にしても、文壇で非凡人あつかいされている鷗外漱石にしても、日本がこうなろうとは予想も空想もしなかつたであらう。敗戦後の人間心理、社会心理、それに連関して、人類固有の生存心理の発露を彼等は知らなかつたのだ。彼等の経験しない経験を我等は経験している訳である。しかし私などのような老人は、前代人の知らない新しい人生経験を新たにしても、それによって新たな芸術を開拓するとか、生活に於て新しい道に突進するとかの力は欠いで、悪時

代によって悩まされた頭で、ぽかんと嶮しい世の中を見ているだけである。今頃流行している記録文学は、時代の流れを知らんとする読者の要求に基くので、私なども興味を有っていて、おりおり読んではいるが、記録が本当の記録であるとしても、大抵はお粗末である。筆者の態度も書きっ振りも卑俗なものが多い。乱世の今日、ただ忙がしく、売れそうなものを早く市に出して、売りひさごうとしているだけのように見える。そういう種類の記録を芸術化し、小説化している作品も多少はあるが、その芸術化小説化が邪魔になるようなもので、何の飾り

も掛け値もない、記録そのままが、却って読み心地がい
いように思われる事もある。ブヴァールが「いや、有り
のままに描くべきです」と云っているのに同感したくな
る事もある。記録文学肉体文学封建時代文学などを、い
ろいろな娯楽雑誌で読んでいると、浅草の享楽街の光景
が思出される。私をはじめて上京した頃でも、浅草趣味
と云うと、卑俗なものとされていたが、今から見ると風
格があり、もつと情緒ゆたかであったように回想され、
今の興行物の絵着板なんか見て歩いていると、便所の落
書見たいなものが並立しているような感じがされる。敗

戦のためであろうが、いろんな興行物も昔に比べて墮落したと云ってもいいのだろう。それに連関して、娯楽雑誌所載の小説も、新聞の連載物も、救い難いほどに墮落し臆面なく低調痴呆振りを露出していると云うのが、通り一ぺんの感想であるが、必しもそうでないとも云えるのだ。私が多少のぞき見したものによっても、戦後の大新聞の小説は、昔の霞亭、幽芳、澁柿園などの新聞小説に劣っている筈はない。彼等過去の通俗作家の小説に比べて劣らないばかりでなく、昔の読売朝日毎日などに出ていた新聞小説——文学史に残る長篇小説——に比べて

も或は遜色がないと云えるかも知れない。日本の現在には、天才が出現しそうには思われないが、戦時戦後の峻烈な人生経験をした作家のうちには、過去の作家を蔑視して自己を樹立しようとしている者もあるのだろう。小説にしても、今までの明治以来の小説が、人生の考え方に於ても表現の為方に於ても、浅はかであったことに気づくのであろう。新聞小説に於て百万の読者を魅惑している作家などは、外形内容ともに、今の読者と心を一つにしているところがあるのではあろう。私はあまり読んでいないのだが、大体の想像はつくのである。アメリカの

小説壇では、尨大な作品が毎年幾つも出版され、ベストセラーとか称して、よく売れる者がすなわち傑れているとされているようだ。私はそれ等のあまり長つたらしいのに辟易して、あまり読んでいないのだが、パール・バックの幾つもの長篇小説や、ミツチエルの「風と共に去りぬ」など、女流作家のを読んでも、在来の歐洲の名作とちがった新味は感ぜられる。国土のますます栄えているその国で、新しい文化がさんらんと輝くのはあたり前であるが、今の日本は、文学に於ても、知らず知らずその戦勝国の感化を受け、意識的に或は無意識的にその模

倣をするようになるのである。ベストセラーなどと云つてよく売れる者を作品としてもよしとして、囃し立てるのもその模倣であるが、民衆主義と云つて、民衆の心を心として、筆を執るようになるのも、おのずからアメリカ模倣ということになるのであろう。

兎に角、今の乱世に於ては、文学でも伝統に捉われていべきでなく、従来の定評ある名家の作品に心酔すべきではない。過去の日本の作家などは、この敗戦苦によつて学んだ人生の真味を知らない甘ちゃんなのだ。旧文学愛好者たる私でさえ、おりおりそう感じるのだから、

感受性豊かな若い作家、若い文学愛好者は一層左様に感ぜられるのではあるまいか。左様に感ずべきではあるまいか。国栄え世の豊かな時の文学と、今の時代の文学とは趣きが異なるに極っている。

近時の新聞小説中の名作の一つであると言われる大佛次郎の「帰郷」を、私は一読した。今の世にこういう人間があってもよかろうと思われるような人間が作中に現われているのに、私も興味を覚えた。「家という観念は、永い放浪の間に、おのれの頭から失くなっている。薄情なことだと云うだろうが、その通りであって見ればこれ

は仕方がない。孤独に慣れて見ると、おれの目から地図の上の国境線が消えて行ったのと同じことで、まったくの他人と、自分の女房や娘との差別が薄れて来てしまっている」「なぜ、人間が孤独でいて悪いのだ。日本人もペルシャ人も区別なく同じに見えてなぜ悪い?」「肉親だからと云って余計に甘えたり憎んだりする日本人の感情だなあ。あれがおれは厭だ。それだけは卒業したつもりだ。隣りの他人と、どう違うのだ」「お互いの祖先の日本人が時々築き上げて遺したものを、こう新しく乱雑になった世の中にも、自分たちの生活や血に、つなが

りのあるものとしてなつかしみ受け取ろうとする心が残っているのか」

しかし、こういう事を云っている作中の男も、つまりは不徹底で旧套を打破し得ないのである。性格の独創がない。それから、作品そのものに戦後的新しさはあるのだが、小説作法は昔ながらである、それはこの作者は数十年来、小説を書続けているので、おのずから小説術が固定しているためである。今日は乱世であって、小説も乱世の産物である訳だが、内容も形式も在来の小説的常道を破った、乱世の象徴見たいなものは出現していない

のであるか。「暗夜行路」のような、キチンと整った作品を現代の小説作法の模範とするのは、この乱世に処する青年作家としておとなし過ぎるようである。正直過ぎるようである。

フロオベエル作中の二人物は、動物について異常な交配の実験をして見たいと思つて、農夫に向つて、牡牛が牝馬とつるんでるのを見ることはないか、牡豚が牝牛を追っかけているのを見たことはないかとたずねて、「そんな事はない」と否定されると、彼等自身牝鶏と家鴨、番犬と牝豚の実験をやつて見た。そうする事によつて何

か怪物でも生れはしないかという希望を持ってやって見たのであった。牡山羊と牝羊を、発情期のやって来た時に小屋に閉じ込めたりしたが、効果はなかった。山羊が山羊の子を生むだけでは面白くない。人間が人間を生むだけでは面白くない。生物上の大改革をやって見ようというのは、阿呆のようであるが、我々にも衷心からこんな阿呆な考えも起るのである。文学の上でも常道を破ってこんな考えを呼起すことがありそうだ。ブヴァールが、「星の世界へも行けるだろう。そして地球が疲弊した時には、人類は星へ引越すのだ」と、空想することに、

フロオベエルは推定しているようだが、このくらいな空想は、今日の我々にでも珍らしい事ではなさそうだ。

日本文学電子図書館

志賀直哉の文学

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館